

高齢過疎地域における福祉住環境システムの構築とまちづくりに関する実践的研究—日本とスウェーデンのコンパクトな住環境再編整備を事例として—

代表 田中 千歳（国土舘大学理工学部理工学科 准教授）

〔研究報告要旨〕

本研究は、高齢過疎化を示しながらも地域福祉に理解があり、福祉住環境構築を推進している熊本県相良村（全人口 5,398 人、高齢化率 30%）と高福祉先進国のスウェーデン国 Alvesta Kommun（全人口 18,684 人、高齢化率 20%）でのまちづくり再編整備を事例に比較検討し、高齢者や障害者も住み慣れた地域の中で生活が継続できるコンパクトな福祉住環境システムに関するあり方について、以下を明らかにした。(1) 相良村の地域住環境システムは、マンパワー不足や福祉サービス及び連携体制の不十分等によって、利用者の理解と周知が難しい。(2) Alvesta の地域特性として、Alvesta のような小規模な町ではコミュニティの基盤が強いため、福祉住環境を構築する意識形成が地域住民の中に既に形成されていると言える。本調査を通して、住民の声を反映するシステムが成されており、機能的であることを明らかにした。(3) さらに空間構成では、町内のどの居住者も徒歩や自転車を中心とした圏域に生活サービスの基盤が確立しており、住宅や施設ではスロープやエレベーターの設置等、どのような身体状況でも容易にアクセスできる構成であった。以上を踏まえて、わが国の高齢過疎地域に根づく福祉住環境システムのあり方として、(4) 必要に応じて建築、医療、保健、福祉等の各種専門家が住生活上の問題に臨機応変に対応する地域特性を生かしたシステムの確立。(5) 住民への地域に対する愛着と育む姿勢や意思の啓蒙普及活動。(6) その土地固有の気候風土や地域特性、ライフスタイル、自然・文化・歴史を生かし、住民に安らぎと快適性、満足感につながる創意工夫が重要である、等を提案した。